

挑戦 2

PMR 資格試験への挑戦

—PMS の 14 年間で得たもの—



株式会社竹中工務店 エンジニアリング本部 副本部長
はやし けんたろう
林 健太郎

1. P2M との出会い

私の P2M との出会いは、東京で PM フィーサーサービスを主に外資系顧客企業に提供していた 2001 年にさかのぼる。当時標準ガイドブック編纂に携わっていた上司から紹介された。建設業は厳しい価格競争の中にあり、プロジェクトで適正な利益を上げることが非常に難しい状況だった。アメリカの PM 資格取得の勉強をしていた私にとり、「この知識体系は今まで見たことがないほど精緻で論理的だが、これに沿ってプロジェクトを進めても、結果の赤字は変わらないのでは」という思いがぬぐえなかった。そして、P2M の可能性に魅力を感じて、出版されたばかりの標準ガイドブックと格闘し、第 2 回 PMS 試験(2003 年 3 月)に合格した。39 歳だった。

2. PMS 時代

2-1. プログラムマネジメントを実務で理解

転機はその年末にやってきた。2004 年初に大阪の本社経営企画部門に異動し、それまでとは全く違う業務を担当することになる。幸い、東京勤務時代から面識があった PMAJ の前身の一つである JPMF で活動する方々が大阪にもいたため、アフターファイブや休日に行われる自己研鑽の場(関西例会、P2M 研究部会)に参加し、プログラムマネジメントや改訂 3 版の第 4~6 部の基盤(事業経営、知識、人材能力)について理解を深めていった。学んだことを会社での実務(戦略立案)に展開しようと試行錯誤を繰り返し、最終的に 2014 年から 2025 年までの中長期計画の策定に参画できた。また、2012 年から 2013 年にかけて、改訂 3 版の執筆に加わる経験も、それまでの自分の理解度を振り返る良い機会となった。

2-2. マーケティングとイノベーションが実務に

次の転機は 2015 年 3 月、東京の本社エンジニアリング部門への異動だった。幅広い分野で活躍する技術者達が所属する組織において、私が学んできた P2M をどう活かせばいいかを考えた。少し先の市場・顧客開拓を技術起点で行うエンジニア達が取り組んでいる活動は、P2M 的に言えば、「プログラムマネジメントで未来の市場のあるべき姿を描き、技術開発、商品企画、人脈形成、社外広報などの様々な有機的に関連のあるプロジェクト群をデザインし、その全体をマネジメントすること。それまでの戦略に重点を置いていた考え方に、マーケティングとイノベーションが具体的に統合された感覚を持つ。30 代若手を対象とした部門内勉強会を 2016 年に始めた。52 歳だった。

3. PMR 受験の動機と試験について

自作教材で、彼らに P2M をどう伝えるかを試行錯誤する中、「やはり、P2M を使いこなせる PMR が目の前にいる」ということがどんな講義よりも雄弁であると思い至り、受験を決めた。選択式ペーパー試験である PMS とは全く異なると噂で聞いていたが、14 年の経験と日々の研鑽を自信に、長文記述やグループワーク、面接など延べ 5 日間の試験に臨み、2017 年 3 月に吉報が届いた。旬の題材から構成される試験問題の作成や採点、面接にあたっての準備など、試験官の先輩方には感謝の気持ちでいっぱいである。

4. 今後の抱負

2008 年 3 月のオンラインジャーナルに「アーキテクチャの魅力」と題して寄稿したことを思い出す。「・・・私が今アーキテクチャを定義するとしたら「さまざまな要素を理解した上で構想されるグランド・デザイン」ということになろうか。・・・今後、日本及び世界がどのような道をたどろうとも、様々な分野でアーキテクチャの重要性が認識され、その実践に役立つ人間として PMA が多数輩出される時代が来ることを願ってやまない。・・・」PMA になる自分の姿を夢みながら、残された数年の会社人生とその後の時間を充実させるべく、自己研鑽を継続していきたい。

【プロフィール】

株式会社竹中工務店 エンジニアリング本部 副本部長

1988 年入社以来、建築設計、プロジェクトマネジメント、経営企画などの業務を経て、現在は新規技術・商品・事業の企画開発に従事。

一級建築士、認定ファシリティマネジャー、PMR